

3. 遠見塚古墳出土の条痕文土器片

佐藤甲二・結城慎一・工藤哲司

ここに紹介する資料は、史跡遠見塚古墳発掘調査の際、表土層より出土したものである。^{註1)}

この土器は、東北中部に於ける弥生時代初期段階を考える上で、重要な資料と成り得るものと思われ、本報告に先がけ発表した^{註1)}である。

遠見塚古墳は、仙台市域のほぼ中央、仙台市遠見塚一丁目地内に位置し、広瀬川左岸の標高10m前後の自然堤防上に位置する。当古墳は、全長約110mの前方後円墳で、東北地方では規模の点で第三位を誇る大型のものである。古墳を含めた周辺はまた、弥生時代中期から平安時代にわたる集落が形成された南小泉遺跡がひろがっている。

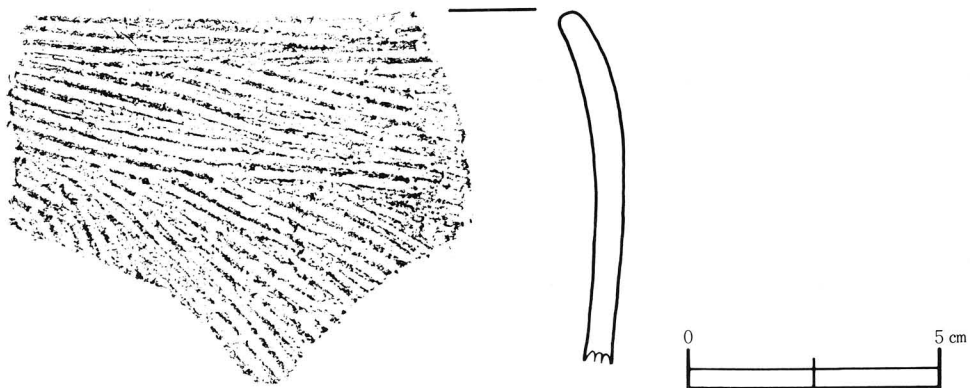
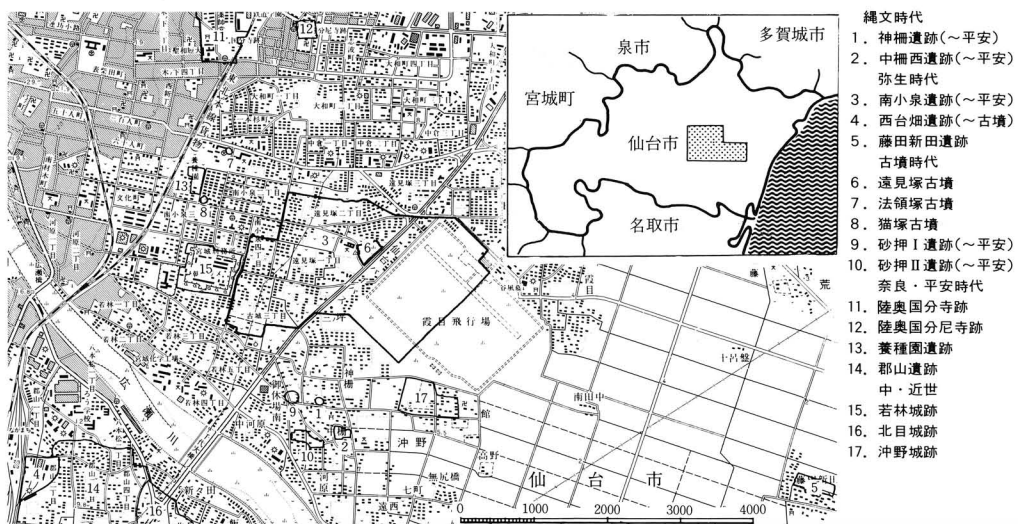
土器片は、口縁部から体部上半にかけてのものである。口縁部が内弯しており、深鉢形の器形を呈するものと思われる。外面は、貝殻状施文具による条痕文が全面に施こされている。条痕の底面幅は1.5mm前後、各条痕間の幅1mm前後を測る。条痕は6条程が1単位となっており、1単位の幅は1.5cm前後である。条痕の方向は、口縁上部が横位、その下位の約2cm幅がやや斜位、これより下位になるとより角度の大きい斜位方向となる。施文順序は下から上となっている。口唇部及び内面は、ていねいな横位方向の磨きが施こされている。器厚は約5mm。胎土には石英粒が多量に含まれるのが目立つ。焼成は良好で、外面黒褐色、内面褐色を呈す。

この土器の外面施文一条痕文^{註2)}は、東海地方西部(愛知県中心)で成立し、その後、東日本まで波及していった条痕文系土器^{註3)}に類例が求められる。さらに、条痕方向(単一方向)、器形の点より、条痕文系土器内でも古い段階に位置づけられる可能性もある。^{註4)}

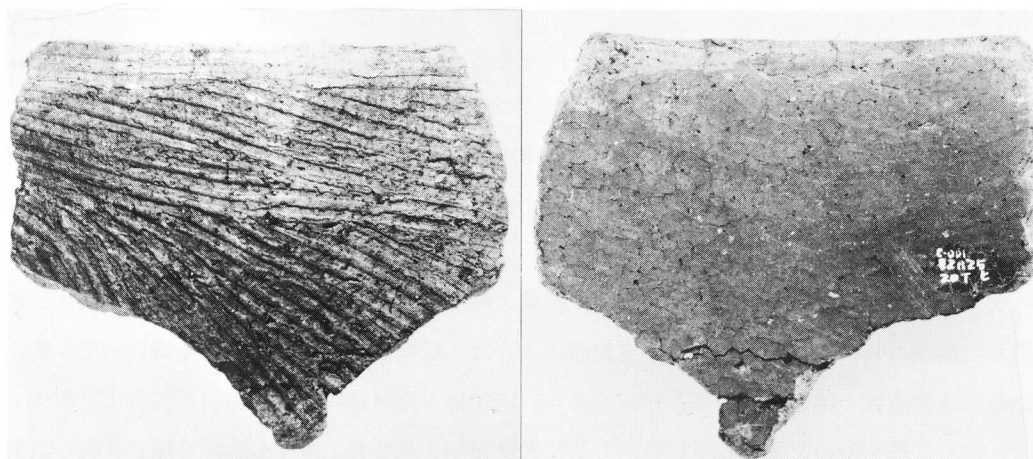
現在まで東北地方に於いて条痕文系土器は、福島県中部以南にまでしか分布を示さなかった^{註4)}。しかし、当資料によりその北限は、一挙に宮城県中部の仙台平野にまで分布範囲を広げたといえる。これから、遠見塚古墳の資料整理が進むにつれ、この種の資料が増加すること、また、仙台平野に於いて、今後、共伴遺物を明確に出来るような遺跡の発見に期待したい。なお、本資料については紅村弘氏よりさまざまな御教示を得た。厚く御礼申し上げます。

註

1. 20トレンチ内出土。結城慎一・工藤哲司「史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報」仙台市教育委員会 1983
2. 紅村弘氏の愛知県を中心とする編年では、樫王式から水神平Ⅲ式(岩滑式)までのものをさす。紅村弘「弥生時代成立の研究」1983 82～91・111P
3. 紅村弘氏の御教示による。紅村氏によれば、水神平式以後の深鉢は、条痕が複方向(羽状)となるものが多く、口縁部は外反し、条痕の形も異なり、当資料とは区別され、あえて類似性を求めるならば樫王式が上げられる(内面調整の上では全く異なる)とのことであった。
4. 古い段階のものでは会津地方の墓料遺跡・上野遺跡が、新しい段階では中通り地方の鳥内遺跡出土土器が上げられる。弘村弘「弥生時代成立の研究」1983 112～113P



撮影 断面実測



外 面

内 面

拓影図及び写真